

西松会新聞

西松会

一橋大学

ア式蹴球部

http://jfn.josuikai.net/
circle/soccer/

「ばすける」の繋いだもの

小平通信を始めて、1年近くになります。会員の皆さま方より、折にふれ貴重なアドバースや叱咤激励などを頂きありがとうございます。今回、色々なやり取り中で、特に皆様にご紹介したいものを厳選しました。

サッカー部新聞の「スペシャル・エディション」のようなもの。タイトルはNumber風。半世紀ほど前のイラストも味わい深く、当時の部室に一気に引き込まれそうな迫力です。ショートパスでつなぐ形式でお届けします



一橋大学ア式蹴球部

新しいシーズンに思う

私たちの同期は、一昨年辺りから還暦となっているが、六十の齢を過ぎて思うようになったことがある。「出会わなければ良かったという人はいないし、経験しないほうが良かった出来事はない」ということだ。「出会った人や経験する出来事は、いろいろな形で自分を成長させてくれる」と言い換えても良い。

去年の大震災や自然災害などでは非常に多くの犠牲者が出たうえに、現在も放射線対策など被害の回復や、次の災害への備えが十分ではないことが大きな課題だ。それでも人間は次の道を見出してゆこうとするのだという思いを強くしている。

一方サッカーを経験したということはどうだろう。高校時代にメキシコオリンピックを見て、こんなに面白いスポーツなのかと目覚め、部活にも参加し、大学に入ってサッカー

年山根先輩、(3)が57年倉崎です。

(1) 我々が4年の時、マネージャーの佐藤君が関東2部復帰に必死の練習をしている中にも部内のコミュニケーションを密に、潤いもと…部誌とは別に自由に文章をと…「文集」を編集しようと企画してくれました。名前は？4年生中心に考えましたが、当時パスカルの「パンセ」なんかを講義で耳にしておりましたので、「人間は考える葦である」をもじって「我々は蹴る足である」、パスカルではなく、「パスして蹴る」すなわち「パスケル」で行こう。文集なので題名は平仮名でと…「ばすける」にしたことも思い出ししました。今、東大OB、東大職員、と巴戦をやっている一橋OBチーム名が「パスケル」と名付けているのを知って、私は何とも嬉しい思いがしております。

(2) 先輩諸氏が作った「文集…ばすける」

部に所属した。それがNHKに就職して報道の世界に長く身を置き、大きな試合を観戦するだけとなっていた後に、短期間だったが「天皇杯」にテレビ局の側から係る立場になろうとは夢にも思わなかった。

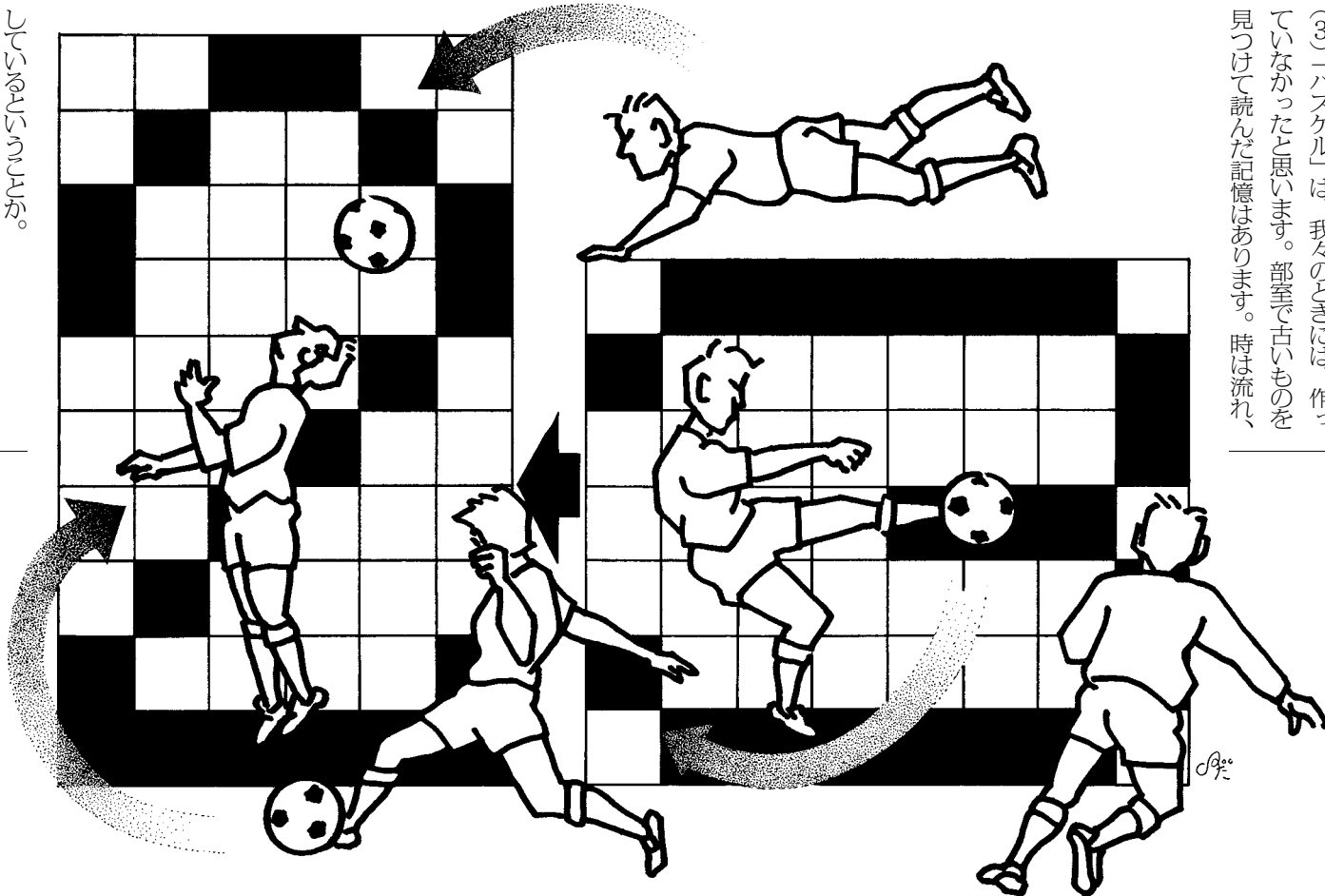
TVの画面でしか見ることの無かった往年の名選手とも話すことが出来た。また最近スポーツ社会学の泰斗と出会ったが、彼によれば「そもそもスポーツは遊びの性格を持っていて、人または自然の障害に挑戦する活発な身体活動であり、最も大事なことは競技スポーツの土台はフェアプレーであり、それがないとどこに真のスポーツは成立しないというのが国際標準」だそうだ。目から鱗が落ちたような解説だ。一方で「フェアプレー」賞を設けているのは、本来は可笑しいのだけれども、現在のスポーツ界の皮肉な状況を反映

は我々が学生の時にも存在していました。そのことが頭にあり、OBチーム名は「パスケル」にしたものです。黙って使わせて頂きすみませんでした。でも何らかの形で先輩諸氏とつながったということはいいいことです。ということでも引き続き使わせて頂きます。宜しくお願い致します。

(3)「パスケル」は、我々のときには、作っていなかったと思います。部室で古いものを見つけて読んだ記憶があります。時は流れ、

5、6年前から先輩に誘われ「パスケル」の試合(東大OB・東大教職員チームとの巴戦)に参加するようになりました。会話の端々に、先輩方の「パスケル」に対する特別な愛着のようなものが感じられましたが、今回そのルーツを初めて知った次第です。

倉崎 嘉幸(昭和57年卒)



しているということが。

私は昨年のリーグ戦やその他の試合を観戦して一橋のサッカーはフェアプレー精神を大事にしていると感じた。

今年からの新しいステージ、勝負の場では、少々苦しい戦いになるかもしれない。部員数はどうやったら増やせるか、グラウンドの改修、より効果のある練習方法、資金面の手当

太平洋の向こうから

まずは、東京都2部リーグ復帰おめでとうございます。卒業しても現役の活動状況は気になるもので、遠くアメリカの地から吉報を期待していました。私が現役の2年生の時やはり東京都3部から2部昇格が決まり、小平の学食での祝勝会がビールかけに発展し、女子マネージャーも含めみんなで噴水に落とし合った思い出がついてこの間のようによみがえって懐かしく思います。

昭和62年に卒業してもう25年が経とうとしていますが、日本、タイでの勤務を経て今はアメリカでの滞在が9年目となります。日本にいたときももちろん、タイでもバンコクの日本人チームで、そしてアメリカでも近所の人達とサッカーをやっていました。実は、最近カリフォルニアからシアトルに引越したため、サッカーが中断していますが、息子の一人は地元の高校でサッカーをやっており、サッカーとのつながりは保っています。

こちらに来て意外に思ったのは、サッカーがマイナーなスポーツであるアメリカでも、

2部復帰を果たす

東京都3部リーグ戦

平成23年度の東京都3部リーグ、一橋は6勝1分け2敗の2位となり、来シーズンの2部復帰を果たした。19年度に3部に陥落後、5年ぶり。

平成23年度 東京都大学リーグ3部順位表									
順位	チーム	勝点	試合数	勝	負	引	得点	失点	得失点
1	首都大	20	9	6	1	2	19	8	11
2	一橋大	19	9	6	2	1	18	8	10
3	日大生資	18	9	5	1	3	30	13	17
4	東工大	16	9	5	3	1	16	7	9
5	東京外語	13	9	4	4	1	18	13	5
6	桜美林大	10	9	2	3	4	7	12	-5
7	都留文科	10	9	3	5	1	13	19	-6
8	国際基督	7	9	2	6	1	14	25	-11
9	東京海洋	7	9	2	6	1	15	28	-13
10	自由学園	7	9	2	6	1	11	28	-17

今シーズンは初戦に東京外語に想わぬ敗戦、前途多難のスタートとなったが、2戦目以降は気持ちを切り替え、自由学園、都留文科、東京海洋海洋科学、国際基督教、桜美林、東工大を降し6連勝。首位決戦となった10月16日の首都大学東京戦では、前半、松村が先制ゴールを挙げたもののPKで追いつかれた。後半はお互い譲らず、1・1の引き分けに終わった。しかし、3位の日大生物資源がこの日引き分けたため、一橋と首都大の2位以内が確定した。4年間漂っていたドンヨリ雲を吹き飛ばしてくれた。

ただ、10月23日のリーグ最終戦、日大生物資源には1・4と完敗、優勝は逃した。来シーズンに向けた課題も突きつけた。

その来シーズン、東京都2部の顔ぶれは、1部から落ちてきた帝京、東京経済大と、残留組の成城、創価、上智、武蔵、日大文理、日大商、それに3部から昇格した首都大、一橋となる。

戦いを終えて

「感謝」という宝物

チームの主将を務めることが決まったとき、私の胸には「必ずチームを昇格させよう、そのために自分に出来ることは何でもやろう」という決意がありました。その一方で「自分にこのチームの主将が務まるのだろうか」というプレッシャーや「結果を出せなかったらどうしよう」という不安な気持ちも沢山ありました。

シーズン中も思うようにプレーができず、チームにプレーで貢献できない自分が悔しくて、焦りや苛立ちをおぼえたことも多々ありました。

しかし、シーズン前に抱えていた不安やプレッシャー、そしてシーズン中に感じていた焦りや苛立ちは今となってはすべて「感謝」という気持ちに変わりました。それは、頼りない主将を支え一緒にチームをまとめてくれた4年生のみんなへの感謝。サッカーに対するひたむきで誠実な姿勢でチームを引っ張ってくれた後輩への感謝。プレーヤーよりも熱い気持ちをもってサポートしてくれたマネージャーへの感謝。そして、現役を暖かいまなざしで見守りながらも、ときに熱い叱咤激励の言葉でもって応援してくださったOBの皆様への感謝です。

小学生から続けてきた長いサッカー人生の中で学んだことは数え切れないほどありますが、この共に戦う仲間とそれを支えてくれるサポーターへの感謝の気持ちはなにもに代えがたい宝物だと思っております。

これからは、2部という一段高いレベルで新しい目標に向かって挑戦する後輩をOBという立場から支えることがこの感謝の気持ちを返したいと思っています。

本当に4年間ありがとうございました。

戸谷 雄貴（主将）

『ありがとう……』

3年間伴わなかった「結果」が付いてきたことで今シーズンはひとまず成功と言えるかもしれないが、それでもやはり、もっとあおしてあげたいという考えはいくつかある。

例えば、新たな問題が生じることをみんなの了解事項として、チームの方向性を定めるべきだった。新しいことを始める時に、他方で短所が生まれることとはしょうがないことだからだ。チームとしてある問題を解決しようとする方向に向かった時、必ずそれによって別の問題が生じた。そちらを気にし始めると、ひとつの方向に向かう推進力が失われる。

最悪なのは新たな問題を気にして、端からどちらへも舵を切らないことだが、今年はそうならなかった時期が長かったかもしれない。

秋季リーグ終盤3戦のピッチ上で自分たちがなにかを示せたかと言われれば、答えに窮してしまう。個人としても同様で、自分の伸ばしたい能力をひとつ定めたら、それに伴う新たな問題は気にせず、目指した方向に走り続けることは大切なことだと思う。

4年間を振り返ると、やはりそれなりに長かったと感じている。サッカーが楽しくてしょうがない期間もあれば、サッカー部での遊びが楽しくてしょうがない時期もあるし、練習がつらいと思う時もある。そういう長い期間、自分が一橋サッカー部に所属していたのは、秋季の魅力にとりつかれたからだ。毎日曜日にガチンコの真剣勝負をする相手がいる。戦いが終われば国分寺や立川でオマツリをし、何事もなかったかのように火曜日から次の真剣勝負に備える。秋の2カ月は自分の大学生生活においてサッカー部漬けになる特別な時間だった。4年目になってもリーグ戦の緊張感には興奮したし、国分寺という街には心ときめいた。後輩たちは、今年2部という舞台でその非日常感を味わい尽くしてくださ

高松 俊（4年 グラフマネ）

四度目の正直

今年は2部昇格を果たしましたが、私自身にとっては喜びというよりも安堵の気持ちのほうが大きい、不思議な感覚を味わいました。私の代は技術のある選手が多く、周りの方からの期待が大きかったこと、またその期待に応えるだけの結果がついていなかったこと（3年連続3部3位）など様々な要因があるかと思っています。

このプレッシャーの中で戦えた経験、またその中で追い求めていた結果が得られたというのは、非常に貴重なことであり、今後の人生においても何かしらの財産になるのではないかと思います。この一橋大学フットボール部という環境に身を置けたことを、非常に感謝しています。

来年からは2部での戦いになり、今まではレベ ルが違っただけでいいことになると思っています。しかし、今の3年生以下については、サッカーに対する想い、向上心が非常に強い部員が多く、また技術のある選手も多いので、十分に上を狙えるだけのチームになると信じております。是非小平グラウンドに足を運んでいただき、叱咤激励して頂けると幸いです。

最後になりますが、OBの皆様には、サッカー部の活動だけでなく、多方面においてご支援して頂き、大変お世話になりました。4年間誠にありがとうございました。今後とも西松会の一員として、何卒宜しくお願い致します。

しくお願い致します。

松村 雅司（4年 副主将）

鮮明な記憶

僕は忘れっぽいです。遠征や授業をはじめとして受験に合格した瞬間や、卒業の先生の言葉など、すぐに忘れてしまいます。しかし、鮮明に記憶されている記憶がいくつかあります。それらは感情の起伏が大きかった瞬間で、全てがサッカーに関する記憶です。

優勝した時や、試合に出られなくて悔しかった時、試合中の自分の好プレーや後悔するプレー。それらの瞬間の記憶は、試合時のメンバーやベンチメンバー、誰が応援にいて、どこでプレーしたのかまで全て鮮明に記憶しています。一橋大学サッカー部の環境は僕にとって特に記憶を植え付けてくれるものでした。

1年をたった1つのリーグ戦に全て注ぎ、言い訳は絶対に許されない。だからこそ、勝った時は文句無しに自分達が相手よりも優れていることが証明され、ものすごく爽快だったし、負けた時は自分達の全てを否定され、本当に悔しかった。昇格が決まって、みんなでバカ騒ぎをして、プレッシャーから解放されて泣いた瞬間は、色々な感情が入り乱れて、今までも最も鮮明に残った瞬間だと間違いなく言えます（お酒で記憶が無くなった瞬間は流石におぼえていません）。

サッカーで感じた感情の起伏に比べれば、他の出来事の感情の起伏ががさむもの無理はありません。自分の成長を余り感じられなくて、イライラしたりしたこともありましたが、そういった類の感情も含めて感じさせてくれた一橋大学サッカー部、ひいてはサッカーに感謝したいと思っています。

おかげさまで、忘れっぽいのは一生治らないでしょうが、あきらめて頑張ります。

山浦 一平（4年）

灯りを消す前に

私は、自分のために努力することができません。そんな私がまがりなりにも4年間この体育会サッカー部を辞めることなく引退できたのは、そして、もう少しでも人として、サッカープレーヤーとして成長できたとするならば、それは周りの人、特に先輩のおかげだと思っています。

プレーはもちろん、その姿勢であったり、人間性であったり、あの人のようになりたいとかあの人と一緒に頑張りたいとかから思える先輩に常に恵まれました。自分もそういう人物になれたらという思いで頑張っていた部分は非常に大きかったです。そして、それと同じくらい大きいのは、前向きな

意味での罪滅ぼしです。これまで先輩方からのいくつかの期待を裏切ってきたし、今年こそ今年こそは、と意気込んでいました。定済したとは到底思えませんが。そういった思いはこれまでの3年間だけでなく、先輩がいなくなった4年目にむしろ強くなっていて、最上級生として我ながら非常に情けな思っています。

サッカー部はサッカーをする集団です。ですが、ただ毎年メンバーや目指すサッカーが変わっていくだけでなく、人の像や思いは伝わっていく、そんな集団の方が少なくとも個人的には魅力的です。それを、人を伝統と呼べるならこんな素敵なことはないと思います。現役のみんな、カッコいい先輩になっ

て下さい。

松本 雄士（4年）

チームが一体となった瞬間

OBの皆様こんにちは。いつも温かいご声援ありがとうございました。

僕は1年の3月にアメフト部を辞めて、サッカー部に入るといっしょにみんなとは違った経歴を持っています。そんな僕が4年生になって、一番上の学年として、チームにかかわるようになった時に感じたのは、焦りでした。

というのも、僕たちの代はサッカーが上手くてプレーで引っ張れるやつがたくさんいて、その中で自分はプレーでチームを引っ張れないという焦りでした。体育会に入ったのだから、誰もが試合に出て活躍して、チームを勝利に導きたいという想いを持って、練習に打ち込んでいます。31人いて、11人が試合に出るといことは残りの20人はベンチ入りか、それすらできないかの状況で、それぞれがいろんな思いを持って秋季の朝を迎えます。

そんなふうに秋季に出られない部員が、チームのゴール、勝利に心の底から喜べるチームになってほしい、という自己満足ではない目標を僕は持つて、今年のチームに貢献していこうと思いました。特に何かできたかと言われれば自信はないのですが、桜美林戦で中村がゴールした時に応援席に走ってきて一緒に喜び、ゴールを喜んだシーンは僕の3年のサッカー部人生の中でも特に忘れられないゴールになっていて、チームが一体になったのではないかなど、思っています。

村上 康一（4年）

今という間に今ぞ過ぎ行く

4年間主に右SH(サイドハーフ)をやらせてい

いただきました。出身は神奈川県の大宮市です。今こうして西松会新聞に記事を書ける事になって、ついに一橋サッカー部に対して自分の出来る貢献が終わりに近づいているのだ、と一抹の寂しさを感じると共に、この機会に恵まれた事に感謝の気持ちでいっぱいです。せっかくなので身の上話を少し。

私がサッカーを始めたのは中学生の時なのですが、中学校で最初に入学しようと思っていたのは実は野球部だったります。運動することがとても好きだったので運動部には所属しようとは思っていませんが、サッカー部はあくまで選択の一つでしかありませんでした。そんな時に出会ったのが中学・高校と主将を務めた同輩の中田という奴なのですが、一橋とは何も関わりがないのでここでは割愛します。

ともかくそういった出会いがきっかけとなって私は中学・高校・大学と足かけ10年もの長い間サッカーというスポーツに関わることが出来ました。この経験が私の人生の中でもとても大切な何事にも代えがたい物であることは想像に容易いと思います。そんな、青春と言える時間の中でも、この一橋サッカー部で過ごした時間は特に思い出深いものがあります。

私が入学した2008年という年は、前年に東京都リーグ2部から3部へ降格した年でもありました。先輩達が前年の雪辱を晴らすと、奮起するなか、右も左もわからず高校生気分の抜けないまま入学した私はきつと年意気で不真面目に映ったと思います。多くの先輩達に迷惑をかけたと思います。秋季リーグの公式戦にも1年生の時から何度か出場していましたが、特にこれといった活躍も出来てはいなかったと記憶しております。

ただそれでも私は私なりに、中学・高校でのサッカー経験を生かせるように頭を悩ませ、中々思い通りにいかないことに苦しんでいました。どうすればクロス精度くらいしか取り柄のない自分が試合で活躍できるのか。この部に足りない要素は何なのか。そもそもFW(フォワード)志望にしておけばよかった…。など、当時のウエブブログにその苦悩の痕跡が残っているのを見て、懐かしさを感じると共に恥ずかしさも感じております。

ただそれは私だけが、という事では全然無く、チームとしてでも毎試合後にミーティングを開き、今日の試合はどうだった、来週の練習で取り扱うべきテーマは何だ、と相手を分析したり自分達のやるべきタスクを確認したりして、手ごわいながらも成長、進歩してきたという自負があります。

今から振り返って見ると、辛かったことも確かに多かったですが、きっと多くの先輩達もそうであつたように、それ以上に楽しい思い出をこのサッカー部からいただきました。先輩にも同輩にも後輩にも恵まれ、何度も助けられた4年間。そこに連綿と受け継がれてきた一橋フットボールという体育会を肌と感じることが出来て大変嬉しい思い出です。

これからも毎年、OB戦があり、OB総会があり、幹事会があり、後輩達が秋季リーグに挑み勝利や敗北を味わうことが繰り返されること自体がとても楽しみで仕方ありません。このサッカー部で得たものはこれから先もずっと私の人生を支えてくれることでしょう。以上を持ちまして私の随想とさせていただきます。4年間の間、お世話になりました。本当にありがとうございました。

池田 圭吾（4年）

常に上をめざして

1、2年の頃の私は、失敗と後悔の連続でした。仕事でミスをしてはチームに迷惑をかけ、先輩方が必死で昇格のために頑張っている中、自分はどうしてこんなにチームに貢献できないのだろうと、無力感でいっぱいでした。

しかし、3年生になった瞬間、そんな弱音を吐いている暇はないことに気づきました。今まで一番近くでお世話になった4年生のためにも、今年は絶対に昇格しなければならぬ。そのためには、自分達マネージャーが足を引っ張る訳にはいかない。だから今年は、自分達にできることは何なのかを徹底的に考え、ひとつひとつの仕事を改善するよう努めました。毎日大量の水柱を持っていたり、プレイヤーを交えて仕事について話したり、集合時間を早めて準備したり…。これらの作業は決して楽ではありませんが、昇格のために自分ができることは何なのか、それをどうやって実行するか、ということを経験を通して実践することは、とてもやりがいがありました。

これらの改善をしたことが「昇格」という結果に反映されたとは全く思っていません。ですが、このサッカー部で、昇格という一つの目標に向かって努力してきたこと、そして、尊敬できるチームの皆さんと過ごした3年間は、私の一生の誇りです。

「昇格はスタートにすぎません。これから一段上の相手に勝っていくためには、現状に満足せず、プレイヤー、マネージャー共に、さらに上を目指す姿勢が必要だと思います。これが限界だ、と自分で決めつけず、常に高い目標に向かって地道に努力していくことが、チーム全体の向上につながるのではないのでしょうか。

私自身、引退した今になって、「もっとこうしておけばよかった」と反省する部分がたくさんあります。なので、後輩マネのみんなには、新しいやり方をどんどん取り入れて、チームにどんどん貢献してもらえたら嬉しいですね。

最後に、「昇格」という最高のプレゼントをしてくれたサッカー部のみんな、OBの皆様、ご父兄の方々に、改めて感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

名和 千紘（3年 マネージャー）

OBのくまやま

2部で勝ち抜くために

現在は東レに勤務し、炭素繊維関連の営業をしておりま

現役の皆様、昨年は2部昇格おめでとうござい
ます。OBの1人として大変嬉しく思っております。今年
は2部での戦いになり既に新チーム始動していること
だと思います。私の学生時代や社会人になってからの
サッカー人生を振り返り、思うつくまに2部で勝ち抜く
ために必要と思われることをコメントさせていただきます。
少しでも現役の皆様のお役にできれば願っております。

1. チームの方針、戦い方を明確に。

私の現役時代も計3年間、2部で戦いましたが、3部
とは一段も二段もレベルが高いと思います。セレクシ
ョンで人を集めている大学もありますので、個々人のス
キルでは及ばないでしょう。しかし、サッカーは上手い
人を11人集めても勝てるスポーツではありません。チ
ームとしての戦い方を明確にし、全員で共有すること
で十分勝てると思います。

具体的には、蹴るのか繋ぐのか、守りのラインはど
こに引くのか、攻め方守り方をどうするのか、という
点を4年生を中心に決め、徹底することが重要と思
います。遅くとも春先までには方向性を決め、後は決
め事を徹底して繰り返し、うまく行かない時には最初
に決めた決事を全員で再共有するようにしたらどうか
と思います。そして一旦決めたことは安易に変えない
ことも重要です。（方向性がブレるので）

2. 練習試合は強い相手と。

練習試合は各上のチームを行うことをお勧めし
ます。なかなか勝てないと思いますが、課題ややる
べき事が見えてくるという点で、強い相手と試合を
しているという自信が、リーグ戦に役立ちます。格下
の相手と試合をするのは、チームの士気を高めるた
めのリーグ戦直前だけで良いと個人的には思います。
せっかく一橋サッカー部には多くの先輩方がいらっ
しゃるので、是非活用頂き、リーグや社会人のチ
ームとの試合を組んで下さい。遠慮は不要です、皆
さんからの依頼であれば、OBは喜んで動きます。
3. 目標は高く。

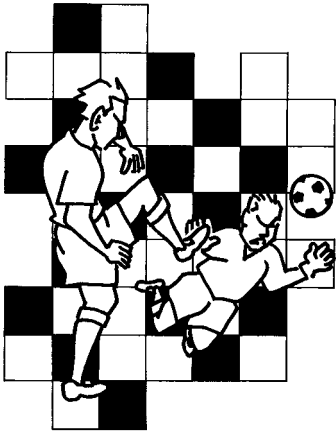
チームの目標は高く設定して下さい。目標が低いと
その目標以上は達成出来ません。

今年で言えば2部残留という目標ではなく、個人的
には1部の優勝を最終目標にその通過点として今年
2部優勝することを目標に戦って欲しいと思います。

最後に、何より重要なのはチームとしての纏まり
です。試合に出ている人も出していない人もマネー
ジャーも監督も一つのチームとなって目標に取り
組むことで何倍にもチーム力は上がります。試合に
出るまでは競争ですが、一旦試合に出るメンバー
が決まったら、残りの人は、全員でチームが勝つた
めに出来ることを自然に行う、そんなチームにな
ってくれることを願っています。

これだけサッカーに没頭できるのは大学時代だけ
なので、後悔しないよう全力でサッカーに取り組
んで下さい。社会人になってサッカーがしなくな
ったら、いつでも東レサッカー部でお待ちしてい
ます。秋の吉報を願っております。

吉野 徹之（平成12年卒、東レ）



昇格の喜びと課題

昨年の3部リーグで、現役サッカー部は接戦を
抜け出し準優勝を勝ち取り、2部に自動昇格した。
過去3年間、1点差の3位が続き悔しい思いをし
てきただけに、祝勝会では現役はもとよりOBも
胸の支えが取れたように喜びを分かち合った。
そしてお祝いムードが一巡してから次のステッ
プである昇格後の課題がそれとなく話題になっ
ていた。因みに私がリタイア後小平に通い始めて
から10年余になるが、その間の2部昇格年度（残
留年数）は、平成10年（0年）、平成17年（1年）
で2部定住は叶わなかった。

平成18年には都学連のリーグ編成が8から10
チーム制に増え、前年度の3部A・Bの上位5チ
ームが2部に自動昇格した。（関東リーグ1・2部も

FC東京躍進の秘密

西松会新聞第4号で「FC東京J2降格
は他山の石」という記事を書かせていただ
いた。今回は続編として「FC東京躍進の
秘密」というテーマで情報提供させていた
だ。

結果から言うと、J2では23勝8分7敗、
勝ち点77で優勝。天皇杯ではJ勢（ヴィッ
セル神戸・浦和レッズ・セレッソ大阪）を次々
と破り、元日の決勝戦でもJ2の京都サン
ガを4-2で破り初優勝。

結果だけ見ると順風満帆のシーズンだっ
たように見えるが、実際には全てにおいて
順調なシーズンではなかったのである。特
に、「青赤通信Vol.1」で今野が話して
いるように、「J1シーズンの序盤は、自分たち
が悪すぎて、勝った試合でも負けてもおか
しくない内容の時もありました」というス
タートだったのである。実際、周囲からは
全勝優勝して当たり前と言われていたにも
関わらず、スタートの7試合終了時点で
は2勝3分2敗の12位と大きく出遅れて
いた。

原因は何か？阿久根社長曰く「負けても
選手同士で全く話をしないんですよ。驚
きです。こんな状態ならいいから負けちゃ
え！って言っちゃいましたよ」というよう
に選手同士、選手とスタッフ間のコミュニ
ケーションが全く不足していると感じたそ
うだ。「サッカーはラグビーと違って選手同

士は競争相手、それぞれが必死にチーム内で生き
残りとうする結果コミュニケーション不足は仕
方のないこと」と言われることもあるが、やは
りチームとして機能するためにはコミュニケー
ションはなくてはならない大切なもの。

ここで「コーチングの専門家」である阿久根
社長が禁じ手を使ったのだ。これまでのサッカ
ー運営会社は「チーム運営のことにスタッフは口
を出すな！」という暗黙のルールがあるなか、「自
立」という旗印を掲げ、社長自ら一人ひとりの
選手に声をかけ、コミュニケーションの起爆剤
になるうとしたのだ。若いゴールキーパーには
「何で梶山にしっかりと守備をしろと意見しない
んだ！生え抜きの先輩には意見が言えないのか？」
と問いかけたり、すでに監督が決めていた「キャ
プテン今野」についても、「みんなは誰がキャプ
テンやったらいいと思う？」などちょっかいを
出したりしたそうである。加えて、監督を含め
たスタッフやFC東京バレーチームにまで「コー
チング研修」を自らやり、コミュニケーション
の大切さと手法を浸透させていったそうである。

もう一つ大きな要素は平山の離脱である。シー
ズン前は平山に当って、こぼれ球を拾い攻撃を組
み立てていくという方針でチーム作りをしてき
たのに、2試合目から平山が離脱し、戦術を変え
ざるをえなくなった。このチーム戦術の変更にも
コーチングをベースにしたチーム内コミュニ
ケーションが有効だったようである。短期間に
戦術の意思統一を図るにはチームメンバーが積
極的にコミュニケーションするしかなかったた
のである。今野も「今季は、みんなで話し合っ
て解決

パターンに重点

裏へのパスを多用、サイド攻撃のパターン化、
積極的なシュート、自陣内から速攻狙いのロング
パス

「練習試合」
各自は目標をもってポジションの役割を、又全
員はゲームプランを試合の中でテストし、試合後
目標の完成度をチェック

以上は足らざるを補う応急対策であるが、本論
は創部九十周年を迎えた一橋サッカー部の原典と
も言ふべき体系的な練習マニュアル及び戦術マニ
アールを纏め、一貫した部活動の指針とすること
にある。

これについては10年前に私案を纏めたが、当時
は関心が薄く没となった経緯がある。

これまでの3部リーグでは現役の自主運営に任

できることがあるというのがわかつた1年。だから、J1でもよいとき
もあるし、悪いこともあるかもしれ
ないけれど、そのときに一人で抱え
込むのではなく、みんなで乗り越え
ていく努力をする。それは続けてい
きたいですね」と言っている。阿久
根社長の言う「自立」と「コーチング」
はメンバーにはかなり戸惑いを与え
たようだが、結果として選手の心に
染みこんだようである。

これらが功を奏したのか、8試合
目からの10試合は8勝2分と負けな
く順位を上げていった。そして
ルークスの加入もあり、2つのタイ
トル獲得へ躍進していくことにな
ったのである。

FC東京の例はプロサッカーチ
ームの特殊な例ではない。一橋大学ア
スリート部のチーム運営にも当ては
まることだし、会社の組織運営など
にも当てはまる基本原則なのである。
与えられるままに指示命令で動くの
ではなく、自ら考え、まわりと積極
的にコミュニケーションしてチーム運
営をすることで結果はこんなにも違
てくるということを頭に入れ、関東
リーグ復帰を目指して挑戦してみな
い！

山根 言一（昭和52年卒、
東京ガスサッカー部OB）

チームへの主体的な関わり

入部して1年目、2年目と、あと一步のところ
で2部昇格を逃してしまつたこと、そして、お世話になつた先輩方に恩返しが
できなかったことは、私にとって大変悔しく、自分の無力さを痛感
する経験でした。だからこそ、3年目のシーズンは、何としても
2部に昇格したいという強い思いを持って取り組みました。

私達マネージャーの仕事は、直接勝利には結びつかないかもしれ
ませんが、プレイヤーにとって少しでもプレーしやすい環境を
提供することが、チームを強くするための私達の使命だと考えて
います。その役割を果たすため、今シーズンは、マネージャー全
員で一つひとつの仕事を改善しようと、些細な部分でも妥協せず、
徹底的に話し合いを繰り返しました。特に、夏合宿の夜や秋季リ
グ期間中、時間を惜しまずに皆で話し合ったことは、今でもよく
覚えています。

もちろん私たちの仕事には、まだまだ改善の余地があったと思
いますが、自分がプレーしないからといって消極的になるのでは
なく、主体的に自分たちができることを考え、マネージャー全員
でその意識を共有できたことが、ほんのわずかもかもしれませんが、
この度の2部昇格へつなげたのではないかと思います。また、
チームに主体的に関わる姿勢は、マネージャーに限らず、部員全
員に求められるものであり、勝つための重要な要素であるとも感
じています。

1つの目標に向かって努力できる素敵な仲間とともにこのサッ
カー部で過ごした3年間は、私の誇りです。共に頑張ってきたプ
レイヤー、マネージャー、そして私達を支えてくださったOBの
皆様には心から感謝しています。本当にありがたかったです。
梅村 薫（3年 マネージャー）

昇格の感謝をこめて

今年は練習・試合のサポートの質を常に磨くことを前提に、プ
レイヤーのモチベーションを向上させる役割も担って、「勝ちに
貢献するマネージャー」として必要不可欠な存在になろうと努力
して参りました。

重要な試合の前にマネージャー同士で昇格に向けた意気込みを
「決意表明」として発表しあうなど、マネージャー8人全員が非
常に勝ちにこだわってきたと自負しております。

このような部員全員の思いが結実し、2部昇格を達成するこ
とができました。このような最高の形で引退できてとても幸せに思
います。

これからは私も、OB・OGの一員として一橋大学アスリート部
を応援していきたいと思っています。

今までサッカーに取り組む環境を与えてくださり、また試合会場
までわざわざ足を運んでくださって応援していただきありがた
うございました。

あらためて、この場をお借りし心より御礼申し上げます。

鈴木 絵美（3年 マネージャー）

志摩 憲一（昭和31年卒）

4年連続の入替戦物語

昭和48年4月に「橋大学サッカー部」に入部し、4年間サッカー漬けの生活となったのであるが、その中で今回は激戦の入替戦（4年連続）に焦点を絞って振り返ってみたい。

「大学1年時」

昭和48年、秋季東京都1部リーグ戦の最終戦・専修に4・1と逆転勝ちし、3勝3敗1分で、かろうじて4位となり、何とか関東大会へと駒を進めた。1回戦・群馬大1・1でPK戦勝利、準決勝・明学1・1でPK戦勝利、決勝・青学0・1で敗戦したが、関東2部7位・上智との入替戦の切符をしごとく手に入れた。

11月、舞台は秋晴れの浦和駒場競技場。前半なかば、MF内田（守）（3年）からのクロスボールをFW山崎（4年）が胸トラップし落ち際をダイレクトで叩くと、美しい放物線を描きながら、ゴールに吸い込まれ、先制点をあげた。そして立て続けに、MF遠藤（4年）がドリブルから2点目をあげ突き放すと共に、後半も上智の反撃を上手く抑え、そのまま2・0で勝利した。念願の関東2部への昇格を勝ちとった瞬間である。

関東大会ではPK戦も念頭に周到な準備をし、そのPK戦ではGK大江（4年）の的確な読みもあり、接戦をものにするなど、運も味方につけ、確かな勢いがあった。

その延長線上に入替戦の歴史的な勝利があったもので、8年ぶりに関東2部に復帰した。

「大学2年時」

昭和49年の春季関東1・2部オープンリーグ戦で法政（当時最強）に力負けしたものの、慶応には2・2の引分、そして2部上位校の順天堂には2・1で勝利するなど、やれるという自信を持って秋に向け準備を行った。

この年には、関東2部でプレーしたいという思いで留年した、DF宮、MF遠藤の存在が選手層を厚くしていた。

秋季関東2部リーグ戦では成城1・0、拓大2・1、青学1・0と勝利したが、東大1・2での敗戦が結果として響き、3勝4敗7位となり、入替戦に臨むこととなった（東大6位）。尚、総得点6点の内、3点をFW高橋（3年）があげ、エースFWとしての存在感をみせた。

11月、舞台は駒沢競技場になり、相手は前年の都リーグで1・4と敗れた駒沢であった。

試合開始と共に、駒沢にボールを支配され、

シュートも数多く浴びる中、ポストやバーを叩くシーンもあったが、GK木内（3年）やDF宮、笠間（4年）を中心とした守備陣の奮闘もあり何とか失点を0に抑えていた。

しかし、後半、ゴール前の混戦から木内がゴールを離れた際に、シュートを打たれ、やられたと誰もが思った瞬間、何とかバレーリングに入っていたDF加藤（2年）が、スパーセービングでボールをパンチし、ゴールの外へはじき出した。今では一発退場のプレーだが、執念の見事な守りであった。

そして、PKをこれまた木内が見事ストップし、駒沢に決して点を許すことがなかった。

試合もロスタイムに入り、駒沢のCKから笠間がクリアしたボールが右サイドにいたFW安部（2年）に渡った。安部はマークについていたDFをかわし、何とかボールをキープし、味方の上がりを持った。そして、センターから駆け上がった、後半投入のMF内田（泰）（2年）にパスが渡り、内田はそのままドリブルでペナルティエリアに侵入し、右サイドの角度のない所からシュートした。その放たれたボールは糸を引いたように逆サイドのゴールネットに吸い込まれた。

絵に描いたようなカウンター攻撃が実った瞬間であった。そして、間もなく終了のホイッスルが鳴り響き、劇的な勝利により、2部残留を果たした。この時の駒沢は本当に強かったのだが、たった一年での陥落は何としてでも避けたいという一橋の残留への執念が上回り、一発のカウンターで駒沢を沈めたのである。

「大学3年時」

昭和50年の春季関東1・2部オープンリーグ戦では、早稲田、慶応、明治と対戦し各々力負けをしたが、その後必死の練習を経て、秋を迎えた。

秋季関東2部リーグ戦では、東大1・1、国士館0・0と引分けたものの、他の大学に1点差負けが続き、リズムに乗れないまま、2分5敗で最下位の8位に終わった（東大6位）。何とか避けなかった下位との入替戦に2年連続で臨むこととなった。尚、総得点は4点に終わった。

11月、舞台は再び駒沢競技場で、相手は初の関東昇格を目指し強化中の専修であった。

一橋も入替戦を前に、三菱重工や早稲田といった強豪チームとの調整試合を経て、万全の状態試合に臨んだ。この試合では、DF寺尾（4年）が持前の馬力で相手エースを早々につぶし、相手の攻撃をダウンさせたことにより、徐々に局面は有利に展開していった。

一橋がリズムを掴む中、攻撃陣も好調でFW高橋（4年）1点、FW池田（克）（4年）2点、FW安部（3年）が3点（ハットトリック）をとるなど、6・2の完勝であった。

リーグ戦での不完全燃焼であった試合の鬱憤を晴らすかのような大勝利でもあった。

しかし、専修はこの完敗を忘れず、次年度にリベンジの機会を狙ってくるのである。

「大学4年時」

昭和51年の春季関東1・2部オープンリーグ戦では、日体大、慶応、青学にやはり力負けしたのを受け、危機感を持って猛練習に取組んだ。

6月の国公立大会の準決では教育大（現筑波）に1・1（PK戦勝利）、そして決勝の学芸大に3・1で勝利した。国公立戦では13年ぶりの優勝を果たすなど、今年こそは、何とか入替戦を回避できるのではと期待を持たせた。この決勝では、FW安部（4年）はハットトリックをあげた。

秋季関東2部リーグ戦では、初戦の順天堂戦の後半、MF加藤（4年）からのセンターリングに安部がダイビングヘッドで合わせ先制点をあげたが、その後、不可解なPKを取られ同点に迫いつかれ、さらに終ア間際にはCKから逆転を許してしまった。この躓きが尾を引いたのか、国士館、青学、明治と残念ながら連敗した。拓大には必勝で臨んだが、0・0と引分けに終わり、それでも何とか体制を直し、宿敵・東大戦を迎えた。春先には東大に完勝していたのだが、リーグ戦の悪い流れを断ち切れず、今回は0・3と痛恨の完敗に終わり、またしても、リーグ戦で東大から勝利をあげることはできなかった。最終戦の立教には3・0と完勝し最後の意地を見せたのだが、1勝1分5敗で7位に甘んじ、3年連続の下位との入替戦に回ることとなった（東大5位）。

尚、このリーグ戦の総得点7点の内、安部は青学、明治、立教戦にも各々1点をとり、計4点をあげ、得点ランキングの上位を占めた。

11月、駒沢競技場での相手は、一橋に雪辱を期す専修で、関東大会の優勝より、敗れて2位となり、対戦相手を一橋に選んできたのだった。

一橋も出来る限りの準備をし、入替戦に臨んだ。前半は専修のミスにつけ込み、FW小池（2年）、安部の得点により、2・0とリードし、DF山根（4年）、負傷欠場のDF永田（4年）に代わり、DFラインに入ったMF福本（4年）を中心に相手に得点を許さず、優位に立ったかと思われた。しかし、ハーフタイムのロッカールームには、チームにリードしている余裕はなく、専修のパ

ワーをボディブローの様に受けたのか、何とも重たく抑圧された雰囲気があった。

そして、後半に入り専修の猛反撃が始まると、一橋のミスもあり、1点を失うと堰を切ったように失点を重ねていった。後半だけで4失点し、立ち直るきっかけを掴めず、完全にペースを握られなまま、2・4で終了。この時、ついに3年間守ってきた関東2部の座から落ちることとなった。

この敗北による挫折感は強烈で、その後暫く消え去ることなく、4年生にとっては痛恨のシーズンとなった。35年経った今でも時々、思い出すことがあるが、恐らく死ぬまで消えぬつらい体験であった。

尚、一橋の壁を失った東大は翌年やはり7位で入替戦に臨み、立正大に敗れ、関東2部から初めて陥落し、その後今日に至るまで34年間、関東2部復帰を果たしていない。

私立の新興大学が続々と関東大学リーグ参入を目標に、サッカー部を強化し始めるという、その大きな渦に一橋、東大も飲み込まれていった時期であったかもしれない。

安部 裕一（昭和52年卒）

日本カーソリューションズ勤務）



なぜあの時足を止めたのか

この年末年始、久しぶりにスタジアムに足を運んで試合を観戦する機会がありました。やはり生で見ると感動もひとしおで、雑駁な話で恐縮ですが、そのときに思ったところを少し書かせていただきます。

その試合は1月の高校選手権決勝、市立船橋vs四日市中央工。ご存知のとおり後半ロスタイムに市船が奇跡的に追いつくわけですが、試合終了後の敗れた四中工の選手の悔しそうな表情がとても印象的でした。「あと一分耐えていれば…」「あと一歩足が出ていれば」おそろくそんなことを考えているだろうな、本当に悔しいだろうな、などと思いつながら自分がかつて味わった人生最大（？）の悔しい思い出を思い出していました。

それは大学4年の秋季リーグ最終戦のことでした。相手は垂細亜大。その時点で一橋はその

試合で勝てば東京都1部との入れ替え戦に出場できるということまで来ていました。

問題の場面は前半半ばに起こりました。コーナーキックのチャンスでDFだった私は練習どおりニアに走りこみました。蹴られたボールは低い弾道でそのニアを狙ったものでしたがやや低くニアサイドをケアしていた相手DFがクリアすると思い、一瞬足を止まってしまいました。

ところがなぜかボールを相手DFの頭上をすり抜けてきたため、あわててヘッドで合わせにいきましたが、一瞬足を止めていたために当たりが浅く、シュートはファーサイドへと流れ、枠には行きましたが、ファーポストにいたDFにクリアされてしまいました。結局試合は0・0の引き分けに終わり、結果として入れ替え戦出場を逃してしまいました。

もちろん試合中にはほかにも得点チャンスはありましたが、この場面についてチームメイトから特に何か言われたわけでもありません。そういう意味では覚えているのは私だけだと思うようなよくあるシーンのひとつなのですが、今でも「なぜあの時一瞬足を止めたのか」と悔しくてなりません。きっと四中工の選手たちの中にもそういった「思い出の場面」がたくさんでいたのではないかと思いつながら、試合終了後のベンチを見つめていました。

今、3歳の長男にサッカーを教え込むべく、毎週末いっしょにボールを蹴っていますがそんな悔しい思い出も含めて、サッカーの楽しさを伝えていければ、そしてサッカーを大好きになってくれればと願っている今日のことです。

（昭和63年卒、トヨタ自動車勤務）

神原 直秀

サッカーに必要な要素

念願の2部復帰御目出度う。チームが一丸となって纏まった結果と思います。4年生の諸君は本当にご苦労様でした。

ところで私はプレーするサッカーから観るサッカーになって久しくなりますが、幸い自宅が日産スタジアム、三沢競技場に近しい為（小平には片道2時間を要するが）サッカー観戦に恵まれ、堪能しております。

そこでサッカー観戦を通じて考えさせられたサッカーに必要な要素に就いての私見を述べたいと思います。

サッカーと言う競技は、ペナルティエリア内におけるゴールキーパー以外、手（人間の体で一番器用な部分）でボールを扱うことが禁止されている為、主として足、場合によっては頭や胸でボールをコントロールしなければならぬ。

従ってボールコントロールの習熟に多大な努力を要する結果、手段であるボールコントロールを目的と錯覚されかねない。サッカーは相手ゴールにより多くボールを入れたチームが勝つ競技で、ボールコントロールは必要な技術の一つで、之に匹敵する要素として次のようなものがある。

1. 広いグラウンドで90分走ることができる体力
2. 気力・闘争心
3. 判断力
4. ボールの争奪に勝つ技術
5. チームプレー

此の内3・4に就いて詳述したい。

判断力に就いて

サッカーは広いグラウンド上で、間断なく攻守が入れ替わる競技である為、プレーヤーは夫々の状況に応じ自ら最善と判断したプレーをせざるを得ない。

適切な判断をするには、普段から状況に応じた最善のプレー選択の基本を身に付けると共に、相手に負けない強い意志を持った責任あるプレーを心掛けるべきである。

安易な盲目パスや、自陣深い位置に於ける外から中への弱い横パスなどは論外。

シュート無しにゴールは無い。

ボールの争奪に勝つ技術に就いて

サッカーはボールの争奪に勝たない限りゴールを得ることが出来ない。またボールを保持する限り負けはない。従ってボールを奪う、或いはボールを奪はれない技術は極めて重要である。

ボール争奪に勝つには鋭い出足、身体でのブロック、フェイント、切り替えし、タックル等々の技術を身に付ける必要がある。此の為には1・1の練習が不可欠である。

以上思い付くままに纏々述べたが、サッカーは単にボールコントロールの優劣を競う競技でなく22人のプレーヤーが広いグラウンドで自由に自分の能力の総てを発揮する競技で、これが観戦するものに感動を与え最高のスポーツと言われる由縁であらう。

サッカーでは「3B」が大切だとよく言われる。「3B」とはボールコントロール・ボディバランス・フレイションのことである。

高田 勝巳（昭和30年卒）

協会改革の日々

第4号に続き久保田秀一さん（昭和37年卒）による「日本サッカー協会の改革に取り組んだ日々を振り返る」シリーズの後編です。

久保田 秀一（昭和37年卒）

「天皇杯改革」

―出場資格の見直し―

1921年に第一回が開催された天皇杯は、95年の第75回大会（出場32チーム）までは、Jリーグなどのシードチームに9地域の代表チームを加えてトーナメント方式で大会が一貫して行われてきた。サッカー発祥の地で行われているF.Aカップは、登録全チームが参加して競い合いNO1を決定するモデルであった。日本のサッカー競技の普及と発展を全国規模で図り各地域での活動をより活性化させるために、日本協会は各都道府県協会と連携して天皇杯全日本サッカー選手権大会を思い切って改革し、各自治体や地域の産業界の協力が得られるように枠組み作りに着手することに決めた。

改革の基本理念は、天皇杯は全登録チームでのフルエントリー制の大会を建前とすることであった。具体的には、①都道府県協会は、1種・2種の全チームに参加権を与え天皇杯都道府県予選大会を実施して、47都道府県代表チームを決定する。②シード出場枠をJリーグ・JFLリーグに大学チームを加えて拡充した。この提案は95年9月の理事会で、翌96年第76回天皇杯全日本サッカー全主権大会実施要領として審議と承認された。まさしく大改正であった。

その結果、これまで選手権大会を実施してきた都道府県は6、76回大会に向けて新たに都道府県選手権大会を構築し実施した都道府県は33、77回に実施できたのが6、78回に2と全国47の足並みが完全に揃ったのは2・3年が経過したが、その結果、参加チーム数は全国6、107チーム（77回）に上った。特に話題となったのが、2種の登用であった。立案当時、若手協会職員の中で頭の柔かい小野沢洋君（現ミューシウム部長）が口を炙らして「部長、天皇杯に高校も入れましょうよ！」「あっそうね！」で決定したのが懐かしく思い出される。

初年度76回では、高校チーム3チームが都道府県代表に、77回では6チームが代表決定戦で敗れたものの市立船橋高や鹿児島実業高ら10チームが代表権を獲得した。77回大会の1回戦では、鹿児島実業がJFLコ

ンサドーレ札幌と、私立船橋高は総理大臣杯覇者の駒沢大と対戦するなど、若い選手たちにとってはやりがいのある、見る側にとっても興味深い対戦であった。東京代表は、青山学院大学が横川電機を2・0で下し代表権を獲得した年であった。

―共催にマスメディアや一般企業の協賛―

一方で、天皇杯の更なる活性化、47都道府県選手権の発展を目的に、日本放送協会（NHK）と共同通信社とを「共催」に取り込んだ。これは、マスメディアを通して天皇杯および、各都道府県選手権大会に関する事業を広く伝達し、サッカーに関与する人々にも含めてより多くの人たちの関心を集めることにより、より充実した、やりがいのある環境（大会）を創出することを意図して実施した。昨今でも天皇杯都道府県予選の結果等をNHKが広く報道したり、大会1回戦を地元NHK局がテレビ放映したりしているのはこの「共催」効果の一つである。競技場内に広告設置の道を開き、広告費収入も組み込んだ。地域の企業が競技場に広告を掲出して協賛してくれた。

―事業化―

天皇杯開催規程の大幅な見直しにより、都道府県協会は自主開催自主運営により本大会を事業として取り組みが始められた。売り上げが収入になり、登録チームに割り当て販売をして収益を確保なものにした。都道府県協会は潤った。その一部を日本協会に上納させた。日本協会が一番儲かったのは言うまでも無いことであった。又チケット部長と言われた実績の一つに、天皇杯を登録選手に気軽に観戦してもらえるように、天皇杯1・2回戦の前売り券については、通常の券より200円〜500円安く料金を設定した。加盟登録選手は、チケットピアで「登録選手証」を提示すれば割引料金で購入できたし、大金目窓口で購入も出来た。協会から前売りを購入したチームのコーチが、部員をアロソロ連れて開催会場に向う姿を見て嬉しかった。

かくして、日本サッカー協会はJFAニュースNO161で「協会創立75周年を契機に「天皇杯全日本サッカー選手権大会」の開催方法を大幅に改革することにより、同選手権は歴史と伝統、権威、競技レベル大会規模などすべての面において、日本サッカー界最高の大会という位置付けがより明確になった」と高らかに自画自賛し、そのシステムは今日に引き継がれている。国立での天皇杯決勝運営を日本協会から東京都サッカー協会に移譲した結果、東京都協会は潤い法人

化を達成した。以前から審判員の先導として指導してくれていた安田東京都協会理事長は、ニヤニヤしながら「久保田の銅像を建てなきゃいかん！」と、都道府県協会の立場に立った采配を旁ってくれた。天皇杯決勝はそれまで日本協会直轄事業であったが、これを年末の準決勝戦同様に東京都協会に事業を移管した。日本協会若手の中には儲かる事業の身売りには不満でうな顔も見られたが、日本協会はあくまで主催者、試合を運営し主管するのは都道府県協会という筋論を展開した事業部長の判断に、文句は出番を失っていた。

天皇杯改訂を機会に、都道府県協会の主管が確立した。

「女子部」

―誕生の背景―

「久保田さん、今度は女子やってよ」と豊島事務局長が叫んだ。豊島さんは、自分が協会入りした時は、四国代表理事（愛媛県協会理事長愛媛新聞社勤務）として日本協会理事会では最も若く、常に真正面から取り組み正論を展開して論客であり、現場の問題点は熟知していた。キリンカップ国際試合愛媛大会で、下打ち合わせで事業部長として松山に飛んだ時、彼は空港で県協会幹部を促え出迎えてくれた。ところが、早速、空港前の喫茶店で5か条の要求事項を突きつけ興奮気味にしゃべり続けた。販売するチケットは、数万枚を預からせてくれ等、それまではすべて以前の日本協会担当者が「NO」という事項であった。私はすべてにOKを出した。愛媛大会は成功した。彼は間もなく日本協会職員として招聘され、私の上司、事務局長となった。現場を知り、あるべき姿を見据え、理事会では敵なしの社会人事務局長と社会人出身の私とは意見の相違は無かった。協会を占拠するマンネリ事務局の中に、改革を行える環境が整っていた。彼は女子の実情を常に憂えていた。

日本における女子サッカーは、1980年に第1回全日本女子サッカー選手権が開催され、80年代以降急速に普及し、その競技人口も増やしてきた。その後、リーグの発足や各種大会の開催が始まり、それに連れて日本女子代表の強化が進み、95年の世界選手権ベスト8で96年オリンピック代表権を確保し、競技全体が大きな進歩を遂げてきた。しかしながら、男子のサッカーに比べると、歴史は浅く、その規模はまだ小さかった。活動環境の未整備、指導者不足、女子チームや競技人口の拡大なく、解決を急がねばならぬ問題が多かった。女子は長い間日本協会の蚊帳の外にあった。やっと女子委員会が発足して女子登録も男子に倣って1種から4種まで区分されていた。豊島事務局長は、変革に避けて通れない選手登録を扱う登録部長を兼務すると同時に、自ら女子委員会委員長を兼務した。そ

して「女子部」を95年9月に設置した。

―女子が抱える課題―

人を引っ張りこんで何とも指示しない事務局長、しばらくは、私も何をしても良いのか何もわからなかった。とりあえず、女子サッカー先進国を調べてみたら、日本との相違点が浮き彫りになってきた。先進各国では、日本で言う小学生以下の年少者では、男子・女子の区分けがなく一緒にプレーしていた。日本では幼稚園サッカーでは男女分けがないが、小学校からは別れた以外の大多数の女子は、他の種目に流れていた。例外的にクラブで女子小学生がプレーしていても、中学に入ると又受け入れる女子サッカー部は殆ど無かった。これでは、普及はおろか強化どころではなかった。日本のスポーツの大会は、学校チームが核になり長い間行われてきた。これも再構築しなければならなかった。取り組んだ施策は、次の通りであった。

―登録制度の変更と

各大会出場資格の改訂―

登録制度においては、それまでの男子同様4つのカテゴリーに分けていたが、96年度から種別を廃止し女子一本にして登録し、各大会規定の参加資格で年齢を規程することにした。これに伴い、大会の参加資格が「歳以下の選手」というものに改革され、従来の「チーム単位」での参加から、選手個人を重視したものに改められた。具体的には、従来の大会と比較して大きく違う点は、予選には選手が登録さえしていればチームを編成して参加でき、全国大会である「全日本女子ジュニアサッカー選手権」と中学生年代を対象とした「全日本女子ジュニアユースサッカー選手権」では、単独チームのみならず、単独チームを中心とした補強選手の参加、地域選抜チームの参加も認められた。これにより、女子選手たちは日本サッカー協会の加盟登録選手であれば、これらの大会に参加の道が開かれたことになり、点在售る女子プレーヤーに参加の機会が拡大した。

その結果、96年7月開催された第1回全日本女子ジュニアサッカー選手権では、単独チームのほかに複数回の「選抜チーム」が参加した。97年3月に開催された第1回全日本ジュニアユースサッカー選手権において、9地域代表チームの内訳は、九州・東北・北海道が地域選抜、北信越・東海・関西・中国・四国が県選抜、関東のみが単独チームとなった。これらの新しいシステムについては、導入当初なかなか理解されない面もあったが徐々に各地域やチームに浸透していった。そ

して、女子サッカーにおいて、最高位の大会である全日本女子サッカー選手権の決勝戦を第18回から国立開催とした。

―難関―

全日本少年サッカー大会への出場―

国際的にみて年少期に男女別々にサッカーをさせているハンディキャップは何としても解決したかった。しかし、読売で行われている全日本少年サッカー大会は、女子の管轄を超えて4種委員会の理解と協力が必要であったのは言うまでもなかった。歴史と伝統がある読売少年の大会は、当然各地域で少女の参加を拒否し続けてきた歴史があるだけに、携わってきた指導者の立場上、簡単には行かないのは想像できた。

しかし、努力の甲斐があつて2000年2月の理事会で「第4種大会への参加資格変更」が審議され改定された。参加資格チームは、第4種及び女子加盟登録とし、男子選手のみとした条文は削除された。この結果、同年夏開催された大会で初めて3名の選手が登録され、読売のグラウンドで身体の大きな女の子が男子に混じってプレーするのが見られた。心の底から「頑張れ！」と叫んだのを覚えている。

これが日本の女子が力強くなる環境が整った歴史的な第一歩であり、今日のなでしこJAPAN誕生の出発点でもある。それから11年、あのワールドカップ優勝は、初代女子部長にとっても正に「想定外」の快挙であった。そして又、午前全日本女子、午後天皇杯の本年の元日決戦では、やっと両輪が整い、企画実行したあの頃の夢がやっとかなえられた思いである。

「審判部」

―改革のきっかけ―

事業部・女子部と3年すつやつした時、豊島事務局長は浅見審判委員会委員長と相談して審判部を立ち上げた。浅見委員長が推薦する若手国際審判員が教職を退き審判部に招聘され、部長は豊島事務局長が当面兼務した。ところが、教職の世界からいきなりの慣れない協会仕事に自信消失して重いうつ病で入院してしまった。

「久保田さん、審判部やってよ！」私は、元1級審判員でもあり審判委員会委員でもあり審判の世界のこととは知り尽くしていた。「何すんのよ？」「あいつの病気を治して欲しい。治るまで部長やってよ」。

浅見先生も教職を退かせて協会に誘い込んだ張本人、困惑しきっていた。審判部長席に座ってまもなく、予算折衝で例年通り6500万円要求したら、すっぱり4000万円に削られた。事務局長曰く、「自分で稼いでくれ、とにかく金がないんだ」と下を向いた。クールに考えた。金集めについて、他の業種や組織を見

渡した。お茶・お花・舞踊・楽器などのお稽古事にそのヒントがあった。それで立ち上げたのが、98年春の理事会で承認され翌99年からスタートした「審判員総合登録制度」である。審判部の収入は一挙に2億を超えた。事務局長が言った。「久保田さん、使わせてもらうよ」。

―審判員総合登録制度の概要―

1、審判員の登録の窓口を1〜4級すべてを都道府県協会にした。2、審判員は所定の登録費を所轄の都道府県協会に納入する。都道府県協会、地域協会、日本協会は、それぞれ適正な登録費を登録審判員から徴収し、円滑な審判活動を行う原資とする。3、日本・地域・都道府県協会の各審判委員会の組織と業務分担について明確にした。4、日本サッカー協会は、サッカー競技規則・審判手帳・ウッペン（1〜4級）などを都道府県サッカー協会に販売し、都道府県サッカー協会はそれらと名簿・テキスト等を併せて、全1〜4級審判員に販売又は配布する。

―その結果―

日本協会登録費として4級審判員（10万人）1000円、3級（18万人）1500円、2級（0・25万人）2000円、1級（1000人）1万円が毎年上納される仕組みが出来上がった。幼稚園・少年などすべての競技会に出場するチームには登録審判員数名をチーム登録の必須要件として義務づけ、講習会受講による審判員資格取得の負担を作り上げた。日本協会は、全国の講習会で使用させる競技規則・ウッペン・ビデオを制作し販売した。都道府県協会も地域協会もそれぞれのレベルでの審判活動を円滑にするための原資として全登録審判員から相応の登録費を徴収した。

通常の都道府県協会では、選手登録費を主な財源として細々と運営されていたが、この審判員総合登録制度実施に伴い、日本協会お墨付きの金儲けが出来ることになり、どこでも審判部は円滑な審判活動が展開されているようにリッチになり、協会全体も多少潤ったようである。この審判員総合登録制度が発足してまもなくの頃、東京都社会人サッカーリーグに所属していた長男が、東京都サッカー協会審判部主催の1日審判講習会を受講しに行った。競技規則・4級ウッペンを片手に帰宅して開口一番「お父さん！8千円も取られたよ。超信じられねー！何これ！？」

昨年久しぶりに日本協会の御殿を訪ねたところ、当時審判部は3〜4人であったが何と20名に膨れ、審判スクール講師7〜8人も常駐していた。小倉会長に審判部になくさんいるけど、実績が上がってんの？」と尋ねたら、「ワールドカップで日本の審判員が節を吹いてますよ！」と胸を張った。

日卷 久匂男（昭和37年卒）

倉田徹君のこと

同期の倉田徹君が、約3年におよぶ闘病生活の後、昨年12月22日に亡くなりました。昭和47年の大学入学から51年の卒業までの4年間で、共に小平で練習したサッカー部同期11人。ようやく還暦を迎えようとした矢先で、早過ぎた人生でした。心からご冥福をお祈り致します。

倉田君は広島出身で、入学当初からサッカー部に入学し、特に4年生時にはクラブのマネージャー（当時は「主務」と呼んでいた）をして頂き、学連の窓口としてサッカー部に貢献して頂きました。

追悼

昨年の日本 サッカー界では、なでしこジャパンの女子ワールドカップ優勝という途方もない快挙に興奮し、更には、やや身びいきですが、わが一橋大学ア式蹴球部の東京2部復帰という慶事に巡り合う幸運もありましたが、やはり昨年日本は、東日本震災と福島第一原発事故に象徴される、言いようのない辛い年であったように思います。

今年は壬辰の年、昭和27年生まれの方は、秋に還暦を迎えますが、来年は定年の年齢を迎えるという状況に加え、自身の健康問題や、いろいろな報道されている突然人生の幕を下ろさせられてしまった、多くの震災被害者の無念さに思いを寄せ

我々が2年生時に、関東リーグ2部との入れ替え戦に勝利し昇格しましたが、2部でのリーグ戦が始まった3年生からは、毎年東京都1部との入れ替え戦を余儀なくされていました。それでも全部員の総合力で、何とか4年生時まで2部に残留することができました。

その間倉田君は、三年生の頃から先輩主務について学連の打ち合わせに頻繁に出席して、リーグ戦や春の1・2部交流戦、練習試合の調整はもうろん、遠征や合宿の事などに奔走して頂き、学連の中でも重要なポジションを築き上げてきました。明るく物おじしない性格で、ひょうきんな一面もあり、誰とも打ち解けあって話し合える雰囲気を持っていたからこそ、やり遂げられた仕事だと思っています。我々は全く倉田君に頼っていました。

「このごろ思う」と

るうちに、昨年後半は、どうも重たい気持ちになっていました。

こうした年の瀬のある日、高校時代の同級生であるM君の奥様から一通の欠札挨拶状を受取りました。この夏、M君が病で逝去されたという連絡でした。毎年年賀状を遣り取りしており、特に病気がちとは聞いていなかった彼が亡くなるとは、突然の訃報に愕然としました。

そうした矢先、ここ数年、厳しい病で闘病中のわが部同期の倉田徹君が、専門病院から転院した地元の病院で、五九歳の若さで逝去されました。転院前後に病院を訪ね、僅かな時間でしたが、奇跡を祈りつつ、同じ時を過ごさせて貰いました。12月22日も言いようのない辛い日となりました。

葬儀の日、会場に掲示されていた闘病中の倉田君の一文に目を惹かれました。

『…ただ、残念なことはある。長年連れ添ってきた女房や子供たち、それぞれの連れ合い

私は個人的にも、一時期武蔵境で下宿が近かったことや、学生時代から交際していた奥さんと実家が同郷であること、さらに広島銀行に勤めていた倉田君と同じ広島県に勤務している関係で、学生・社会人を通じて親しくさせて頂きました。学生時代は、お互いの下宿に寝泊りし、夏休みに倉田君が奥さんの実家を訪問したときは、私の実家にも泊まって頂きました。社会人になっても、たまに広島や彼が出張の折に福山で飲んだこともあり、永年の間、楽しい時間を共有させてもらいました。

上京の折のサッカー部の懇親会に、闘病中にも拘わらず奥さん共々出席してくれたことが思い起こされ、自分が苦しくても人に嫌な顔を見せず、いつも相手のことを考えて言動を取ってきた倉田君の生き方は、皆が認めるところであり、今更ながらその有難さに感謝しています。台掌

佐藤 健太郎（昭和51年卒）

恩返し

2年生のときかな？
降格のかかった入れ替え戦。東大本郷グラウンド。同点で迎えた後半。
竹内さんからのグラウンダーのクロス。あとはゴールに流し込むだけ。
・・・
逆サイドに流れていくボールを卓然と見送る・・・
いまでも夢で見る、やり直したい、あのプレー。

4年だったかな？
1点差で負けている試合終了間際の薫からのスルーパス。
チョン。
ボールの行方を見ずに、コーナーポストで両手を広げて振り返る。
飛び込んでくるみんなの笑顔を待ちながら。

卒業から4年を経て

平成24年立春、大学を卒業してから早4年が過ぎようとしている。4年間といえは、国立・小平で大学生活を過ごした年月と同じであるが、振り返ってみると、その内容は大きく異なっている。

大学時代の4年間は、まさに自由奔放に過
ごしており、生活の中心もア式蹴球部であっ
た。平日は、暗くなるまで練習し、その後は
夜遅くまで部の友人と如水スポーツプラザに
入浸っていた。休日は、練習後、自分たちの
試合のビデオを見ながら反省会をすること
や、部の友人宅に上がり込んで居座ることが
多かった。

そんな私であったが、就職活動における巡り合わせもあり、ア式蹴球部の先輩である森田氏（平成5年卒）の勧めで、大学卒業後は役所に籍を置くこととなった。

1、2年目は、未曾有の経済危機に対応す

るため、政府として累次の経済対策をまとめるため、それを実行すべく予算編成を行っていく過程や、政権交代後に民主党政権が行った「事業仕分け」を踏まえて歳出削減を行っていくやり取りなどを、財政当局の一係員として、間

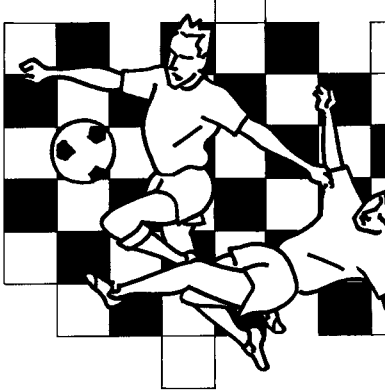
今でもにやけて来るシーン。
雨の日のシャワールーム。全裸でぶぎ合う
泥だらけの部員。
藤の木「ぶぎキキン」の後のあまーい紅
茶。

二日酔いで迎えた練習試合。
 バイトのやり過ぎて、倒れた炎天下の２部練。
 朝から猪岡と食べたスタ丼。
 遅刻しそうになって、おばちゃんと飛び乗っ
 たタクシー。

「定食、大盛り、たまご」スパイクのまま入れてくれる「もとき」。

首都高で車外に投げられるサジのパンツ。追いコンで、寝がロしてる阿部と日影。良い思い出。思い出したくない思い出。たくさんさんの思い出たち。

2011年3月11日。
公民館の掲示板に探したもの。



近で見聞きし、勉強することができた。3年目は、政策金融関連の法案作成に携り、法律を作るということを知るとともに、法案審査から国会審議、成立・施行に到る過程を学んだ。

現在に国有財産行政を担当する部局に身を置き、一係長ではあるが、国有財産（不動産、株式等）の管理・処分に関する総合的な職務を行っている。国有財産と聞くと、保守的な印象を持たれるかもしれないが、ここ数年は「国有財産の有効活用」という観点から、社会福祉や医療、子育てのための施設に対する国有地の貸付といったような新しい試みも行っている。

家族・友人・知人の名前。安否。
人とのつながり。

瓦礫と化した自宅の前で見つけたかったものの。
家族の写真。家族の思い出。

これまで、たくさんの人とたくさん思い出
 を作る事が出来ました。
 それは、僕の大切な大切な「たからもの」。
 そんな大事な「たからもの」を与えてくれた、
 みなさん、
 「ありがとう。」
 そして、
 これからも人と人との「つながり」、思い出
 を大切に生きていきたい。

須田 尚宏（平成14年卒、サントリービア&スピリッツ）

また、昨今では、復興増税や消費増税の議論において、「まず、国有財産を売却して財源を捻出せよ」との声もある。国民の負担を少しでも軽減することができるよう、国有財産の分野においても、出来る限り国家財政に貢献していくことが求められている一方で、国が施策を行う上での重要なツールの一つである国有財産を手放すことにより、ある部分においては国が国民に提供できるサービスの幅が狭まる可能性があることや、今のようにより市況が悪い状況で国有財産を拙速に売却することは、貴重な国民共有の財産の価値を毀損してしまう危険があることなど、懸念すべき事項も多く、頭を悩ませているところである。

目まぐるしく変化していく環境の中で、悪戦苦闘しながら一歩一歩進んできたこの4年間ではあるが、その中で感じたことは、ア式蹴球部時代に鍛えられた目上の人に叱られてもめげない根性や、誰にでもすけずけと物を言える肝っ玉は、非常に有難いものであるといふこと。こうした実体験もあり、現役の皆さんにおかれては、学年の上下に関係なく意見が言える風通しの良いチームを、これからも維持出来るよう心掛けていただければと思う。

影山 昇（平成20年卒、財務省勤務）

岡田監督との交友

東京都リーグ2部昇格の達成、現役の皆さんのご健闘に、心よりお祝い申し上げます。OBとしてもうれしい限りです。今年度の、更なる飛躍を期待しております。

小生、偶々縁あって、前日本代表監督岡田氏と知己を得、自宅が近所でもあり、時々飲みながらサッカー談義や、諸々の話をしております。彼の持味は、（小生の勝手な見方に過ぎないと思いますが）強い意志・信念を持って、決めた事を遣り通す、という点にあるように思います。代表監督を2度に亘りリリース登板し、結果を残したことは、こうした面がなければ中々なしえないのではないのでしょうか。

彼は、Jリーグのビッグクラブからの誘いを断り、中国杭州绿城の監督に就任しています。彼の出発に際しての言葉は、「このチームの指揮を取るとは、白紙に自由な絵を書く楽しみがある」というものでした。身体能力の高い、若手の多いチームに、彼のリーダーシップの下で思考力と規律の強化が図られれば、大きく発展する可能性があるのではないかと、一友人として、期待している所です。サッカー界における、日本人指導者のパイオニアとしての足跡を、いい形で残してほしいと思います。

吉川 實
（昭和45年卒 協和発酵ケミカル社長）

上田栄治やぐいぐい

私自身、技術力はありませんが、やはりサッカーは好きで、60年近い人生に楽しみと感動を与えてくれました。

1972年にペレを、73年にベッケンバウアーを国立競技場で観戦、1回目のロンドン駐在時の82年スペインワールドカップのイングランド戦の観戦、そして2回目のロンドン駐在時の2002年日韓ワールドカップ期間中の英国の盛り上がり（イングランドの試合が始まると街中やお店に殆ど人が居なくなる等）を体験しました。

同期や昭和49年（74年）卒の西松会会員に

は覚えておられる方もいるかと思いますが、印象深い「上田栄治さん」についてお話しします。

72年、私が大学4年の時、同じ東京1部リーグの青山学院大学の1年生に上田栄治さんという人がいました。上田さんは1年からレギュラーと技術力があるだけではなく、そのマナーの良さに感動、上田さんが青学卒業後日本リーグで活躍された時代も、試合翌日の新聞で上田さんの活躍ぶりを追っていました。そのマナーの良さは、ある試合で対戦相手のフリーキックになった際に他選手が時間稼ぎのため遠くに蹴ったボールを自ら走って取って来てフリーキック地点に戻したのです。

その後、上田さんのことは忘れていたのですが、04年ロンドンでアテネオリンピック女子サッカーをテレビ観戦していた時、準々決勝対アメリカ戦後の監督インタビューで上田さんを見つけました。

今年、再度思い出したのはなでしこジャパンがワールドカップで優勝した時です。何と日本サッカー協会女子委員長は上田さんだったのです。（<http://president.jp/articles/-/2220?page=2>参照）

上田さんとは直接の面識はありませんが、偶々知り合いの息子さんが青学を卒業し日本サッカー協会に勤めているので、彼経由でマナーの良かった上田さんの思い出を伝えてもらったのですが、上田さんは覚えておられず、「自分がリーグ戦の対一橋戦でヘディングで得点を決めたことを覚えている」とのご返事でした。又、社交辞令とは思いますが、「機会があれば一度飲みましょう」との嬉しい言葉も頂きました。

この様に、サッカーは楽しさだけでなく、人間形成にも貢献していると実感しています。今後もサッカーを楽しみながら過ごして行きたいと思います。

矢尾板 健二
（昭和48年卒 住友情報システム）

言語の世界にぐいぐい

皆さんこんにちは。昭和41年、ア式蹴球部を卒業以来、サッカーとは縁遠くなり、今は観戦ファンに甘んじています。

そこで、最近かかわっていることばに

ついて述べてみたいと思います。

みなさん、世界におよそ5～6千のことば（言語）が話されていることをご存じでしょうか。すなわち、その数だけ多様な民族が生活しているということです。しかし、そのうち毎年数十の言語が消滅していつており、今世紀中に半減すると危惧されています。

大きな理由は、そのことばを話す民族が属する国家の言語政策に大きく因っています。国が国民を統治するために、政策の一つとして、言語の統一化が必須という考えが強くあります。教育の平準化、情報の共有化などのためにはやむを得ないのかもしれない。

たとえば、日本の場合でも、アイヌ語、琉球諸語、八丈島語などはほぼなくなってしまっています。しかしながら、ことばというものは、人と人がお互いの意思を通じ合うための重要な道具であると同時に、その人の属する民族のアイデンティティーのひとつでもあるはずです。それが、国家統一というエゴのために消し去られていいものでしょうか。

ヨーロッパ（EU諸国）では、政治・経済の統一化政策に並行して、多言語多民族社会であることを認識し、失われつつある言語の復興運動を国際的に認め、その助成をする方向に向かっていきます（たとえば、ウェールズ語・コンウォール語・フリターニ語などのケルト民族系言語の復興支援活動など）。

日本の近隣諸国（たとえば、台湾には20以上の少数民族話者民族もいます）においても、消滅途上の言語を保護しようという機運が高まっています。

私の属するNPO『地球ことば村』では、その活動の基軸を世界の少数民族言語の研究・記録および復興運動への支援においています。

今年度の主要テーマは、在日外国人は日本の中では少数話者であり、3月11日の東日本大震災時、その人々はどのようにして情報を得たのか、何が不足だったかを調査し、今後、伝達手段としてのメディアや各自自治体の体制が、どうあるべきか『模索し、提言していくこと』としています。

希少になった動物・植物の保護への関心は一般的に強いものがありますが、消滅しつつある少数民族言語（ことば）にも関心を強めていってほしいと思う今日のことばです。

堀江 正郎（昭和41年卒）

グラウンド問題を考える時

むかしも今も、小平のサッカーグラウンド

は、関東ローム層そのもののような黒土に覆われている。諸先輩の時代から現在まで同じ環境を維持していただき、日々のトレーニングと公式戦の舞台となって来た。冷血漢に見えたGMの吹く笛のまま泥まみれになった部員の汗と時には涙を吸い取ってきた。私を含め、多くの皆さんは、小平から始まった大学生のスタートを、懐かしく憶えておられよう。あらためて考えれば、大学から無償に近い、低コストでグラウンドの提供を受けてきたことは、充分に、ありがたく恵まれたことであっ

た。しかし、どうやら、サッカーという球技は、贅沢な芝を前提に構築され、人物が育成される時代になった、あるいはそこへの理解が必要になったのではないか。私は最近ついつくそう思うようになった。

サッカーのフィールドは、国際サッカー評議会（The International Football Association Board）によって制定されるサッカーの競技規則（Laws of the Game）第一条に定義され、そこには急速に普及が進む「人工芝」の品質基準も盛り込まれている。

「芝は、既にコンセンサスとなっているかのようだ。大学でも人工を含め「芝」のグラウンドが多く見られるようになった。

これに対して小平はどうか。時代の流れに眼をつむり、手をこまぬいていいのだから



うか。そこでグラウンドについて、現実を直視し、将来的にできることはなにかを考えてみた。問題提起の意味で私見を述べたい。

（将来のために）

・人工芝や天然芝への可能性をメーカーや施工会社の技術進歩についてヒアリングを行なった。サッカーグラウンド一面を人工芝にするには、標準的な品質で@5千万円という話もあれば、1.2～1.5億円程度で、最新レベルの人工芝が手に入るという提案もあった。コストは、西松会諸氏から、1人30万円のご負担を頂くと、総勢400名で合計12億円が捻出できるという数字の規模だ。

・天然芝は、初期費用は低く抑えられ、現実感があるが、一方で、芝の育成には夏の大切な時間を必要とする、日常のメンテナンスの負担は大きい、そしてなによりも、天然芝の耐久性を考えた利用方法を考えて、走りこみや体力づくりの場としてはむしろ適さないなど課題も多い。

・実例として、既に国立に人工芝グラウンドを設置しているラグビー部や、陸上競技部のグラウンドの計画や資金調達活動についても調べた。各々の工夫があり、大学側との協議やメンバーの負担ももちろん必要である。

・さらに、小平のグラウンド上の盟友、クリムゾン・アメリカンフットボール部と、「二橋大学の資産戦略において、小平の将来はどうなるのか」、「国立のスポーツ施設はあたらしくスタジアムすればいいではないか」など、現実のグラウンドの改善や将来に向けた意欲的な案について、意見を交換している。

（三面の課題）

・小平グラウンドのフィールドの広さを、正規の規格に近づけること、土壌を改善し、水はけなどを適正化するなどの現実的な取組みについて、新たな提案を募ったかどうか。

・人工芝での技術トレーニングや実戦スタイルのトレーニングのため、学生独自の調査に加えて、西松会の財産であるOBの方々の人脈を頼りに、近くの人工芝グラウンドを、定期的に優先して使用できる可能性も高めたかどうか。

我々は、あたえられた小平グラウンドに、

実は安住していたのかもしれない。もちろん、グラウンドだけではない、設備や育成方法やトレーニング方法や、恵まれていたことも不足があることも確かである。そこは現実を見つめ、謙虚に、競合相手や世の中に学び、これからの学生のため、相応の負担を学生とOBが分け合い、道を切り開く活動が必要だろう。

（秋季リーグ戦などで、今の小平の姿、ご覧になりましたか。ホームページで、試合の映像がアップされてますので、ぜひご覧を。例えば、画面の端に、何度も練習相手になってくれた、あのシュート板が、朽ちながら、そつと木々と草むらのなかに、今も、そこにいます。）

追伸

学生の皆さん、OBの皆さんは、3・11のあと、東北へ行かれましたか。震災ボランティアも、バスツアーなどでも、行くことが可能です。少しお金を出して出かけても、復興のために、少しか手伝えない現実を見に行くこと、それでもいろいろな人々の想いが集まり、歩みも始めている、それを感じることは大事な経験になりましょう。小平の話は、もちろん大事ですが、いま動くことが必要なくともあります。例えば、被災地の学生と震災ボランティアやサッカーで繋がる活動が、もし大学間で実現可能なら、ぜひ企画してほしいです。頑張りや。

西川 一郎
（平成2年卒 あおぞら銀行勤務）

編集後記

昨年、第4号の新聞を発送して、ほんと一息ついていたら襲った大震災。木内さんの原稿にあるように、なにか重苦しい1年でした。そんな中、現役陣の踏ん張りによる2部復帰のニュースに励まされました。

久保田さんからは前号に引き続き「協会改革の日々」をいただきました。9年にわたる日本サッカー協会人生、サッカー界の激変ぶりが活写されています。安部さんの入替戦続物語、たまたまアレックス・シャーの高まる入れ替え戦が4年連続です。

行き当たりばったりのサッカー人生、想定通りのゴールシーンは数えるほどしかありません。練習中にはうまく行かないスルーパスが足元にびたっと合うという想定外の事態に慌てふためき、ゴールを外しては弁解に追われた日々を思い出します。「想定」には人の奢りが感じられてなりません。

（昭和41年卒、相良 保彦）